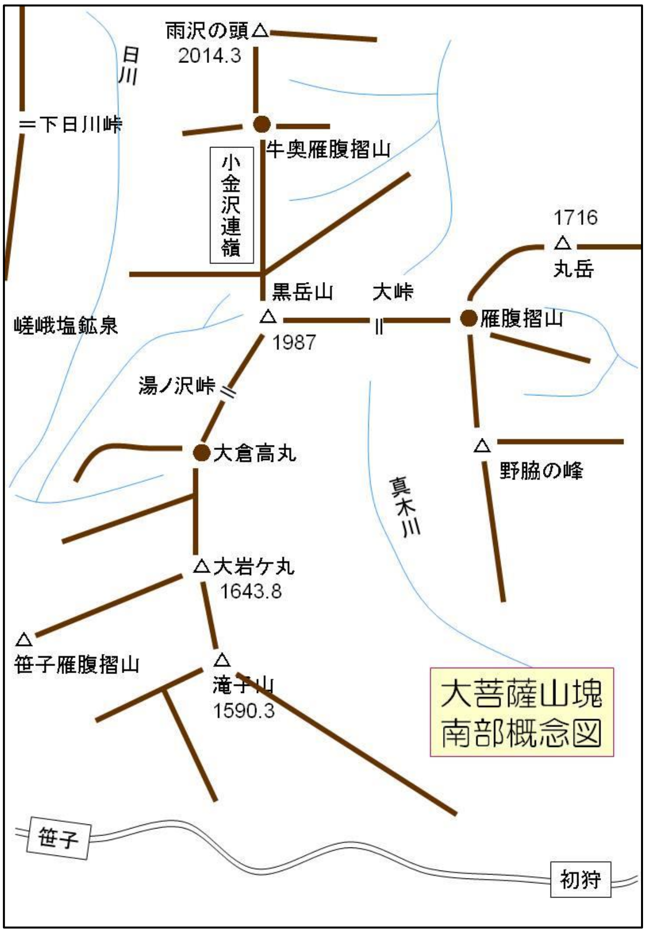
# 踏　み　跡　<　My　mountains　>

| 大菩薩 | 小金沢連嶺南部縦走 | No. 051 |
|---|---|---|

何度となく通いつめた大菩薩連嶺の稜線は次第に赤い線で塗りつぶされ、残るは南部のみとなった。
二月に湯ノ沢峠まで歩いた小金沢の稜線を、滝子山まで縦走しようという計画を立てた。
南アルプス縦走以来約一ヶ月ぶりの山旅、ひとりで、のんびりと。

昭和40年9月4日
新宿発13時56分の列車でゆっくり出発。初鹿野着は16時32分。初鹿野駅を16時35分に出発。
景徳院、田野鉱泉と日川の流れを遡り、天目山橋まで入ると17時35分。
この辺でビバークすることとし、河原の平坦な砂地を探して落ち着く。雨の心配はないし、これより上流にダムもないので、夜中に押し流される心配はまずないだろう。（*註）
暮れ行く河原で、バーナーの静かな炎を見ながら炊事。贅沢に米を炊いて、カレーの缶詰を利用したカレースープ。暗くなると涼しい、さすがに9月だ。
寝ると言っても、ツェルトの中はグランドシートの代わりのポンチョとエアマットと、シングルのゴンスケだけ。今回の山行は、軽い装備での緊急野営の練習も兼ねている。19時15分就寝。




昭和40年9月5日（晴）
4時、寒くて目が覚めた。夜中にも何度となく目が覚めた。空を見ると星がキーラキーラ輝いて、落ちてきそうな気配さえする。朝食は、ソーセージも茄子も入っている豪華版の雑炊。
5時20分出発。焼山沢の流れに沿って上っていく。冬ここを下った時は、凍った沢の渡渉に苦労したが、今は身の丈ほどの笹薮の中にわずかに道らしきものがあり、さほどの苦労は要らない。
一時間と少々で懐かしき湯ノ沢峠（1653m）に着いた、6時35分。
なだらかな草原の彼方に黒岳山の黒い面影。
南へ富士に向かうように進み大倉高丸、7時5分。
海抜 1781m、草原の中の小さな突起で四方の眺めは期待以上のものがある。
東：あの苦しかった薮こぎの思い出、雁腹摺山。
　寄り添うように立つ姥子山の凸凹頭
西：南アルプス、甲斐駒を筆頭に最南端は易老岳
　あたりだろうか、つい一ヶ月ほど前に重い荷に耐えて歩いた尾根も、今は懐かしくうれしい
南：富士山を中心に、御坂・道志の山、中でも目立つのが三ツ峠と御正体山
北：色あくまでも黒く、どっしりと黒岳山
上：青く、とことん青い空　　下：朝露の光る草むら
まさか人に会うとは思ってもいなかったが、やはり向こうでもそう思っていたようだ。ひとりの男が、やはり四方の眺めに見入っている。彼は月末に南アルプス縦走の計画があるとのことで、しきりに甲斐駒を筆頭に連なる峰々を数えている。やはり人の少ない、静かな山歩きを求めていると言う。川崎から来たそうだ。写真を撮

ってあげたら住所と名前を書いてくれた。しばらく話し込んでいるうちに陽も段々高くなってしまった。

（左写真：大倉高丸山頂にて、考えた構図！）

7時45分大倉高丸を出発。ハマイバの丸（1752m）は8時5分に通過し、大谷が丸（1643.8m）に8時45分に到着。昼食をとり景色を堪能。ここまで来ると、ついに滝子山が目の前に現れてきた。初狩や笹子から見ると大きくそびえる感じがするが、ここまで来るとさほどの大きさには見えないのが面白い。しかし、頂上から見下ろす箱庭のような景色を想像すると、自然に足早になってしまう。10時出発。

鎮西ケ池11時、通り過ぎてやや行くと、穴沢山への稜線に出て5分ほどで滝子山に到着11時10分。

三年間思い続けてきた滝子山は遂に自分の物になった。誰もいない山頂で何とはなしに「バンザイ!やったぞ!」と叫んでしまった。標高わずかに1590.3m、「山高きがゆえに尊からず」 とはよくも言ったものだ。

初狩、笹子を走る列車の窓から眺めながら、「いつかは!」と思った日々のことを思い出してみれば、叫びを発せしことも不思議でもない。お湯を沸かして紅茶とおやつで12時10分まで休憩。眼下の谷間を走る中央線の眺めは、地図の上で想像したとおりのものだった。

大鹿川に沿って笹子に下る足取りも軽く、言うことなしの山旅だった。笹子駅着14時20分。

以上

●日川の谷（＊註）

この山行の頃には、日川の谷にはダムはなく、谷沿いに登っていくと嵯峨塩鉱泉があり、さらに登っていくと大菩薩峠や石丸峠に入ることができた。しかし交通の便は悪く、どちらかと言えば秘境だった。後の世で、この谷の一番奥に大菩薩湖（上日川ダム）ができて、普通の車で上日川峠を越えられるような道路も整備された。

●大谷ケ丸（おおやがまる：1644m）

山頂に大きな岩があることから「大岩ケ丸」と言われていた。

これが転じて「大谷ケ丸」となったと言われている。

「岩」を「や」と読ませる山名は大菩薩連嶺の特徴のひとつ。「白谷ノ丸（しらやのまる）」もあり「赤岩ノ丸」もある。

またこれらに大倉高丸も含めて、頂の名を「丸（まる）」とする山も大菩薩連嶺の特徴である。

（修正・更新：2023年10月）